

# 妙な話

芥川龍之介

青空文庫



ある冬の夜、よ、わたし私は旧友の村むら上かみと一しよに、銀座通りを歩いてた。

「この間千枝子ちえこから手紙が来たつけ。君にもよろしくと云う事だった。」

村上はふと思ひ出したように、今は佐世保させほに住んでいる妹の消息を話題にした。

「千枝子さんも健たっしや在ざいだろうね。」

「ああ、この頃はずっと達者のようだ。あいつも東京にいる時分は、随ずい分ぶん神経衰弱もひどかったのだが、——あの時分は君も知っているね。」

「知っている。が、神経衰弱だったかどうか、——」

「知らなかつたかね。あの時分の千枝子と来た日には、まるで気違いも同様さ。泣くかと思つて笑っている。笑っているかと思つと、——妙な話をし出すのだ。」

「妙な話?」

村上は返事をする前に、ある珈琲店カッフェの硝子扉ガラスドを押した。そうして往來の見える卓子テーブルに私と向い合つて腰を下した。

「妙な話さ。君にはまだ話さなかつたかしら。これはあいつが佐世保へ行く前に、僕に話して聞かせたのだが。——」

君も知っている通り、千枝子の夫は歐洲戦役中、地中海方面へ派遣された「A—」の乗組将校だった。あいつはその留守の間、僕の所へ来ていたのだが、いよいよ戦争も片がつくと云う頃から、急に神経衰弱がひどくなり出したのだ。その主な原因は、今まで一週間に一度ずつはきつと来ていた夫の手紙が、ぱったり来なくなったせいかも知れない。何しろ千枝子は結婚後まだ半年と経たない内に、夫と別れてしまったのだから、その手紙を楽しみにしていた事は、遠慮のない僕さえひやかすのは、残酷な気がするくらいだった。

ちようどその時分の事だった。ある日、——そうそう、あの日は紀元節だっけ。何でも朝から雨の降り出した、寒さの厳しい午後だったが、千枝子は久しぶりに鎌倉へ、遊びに行つて来ると云い出した。鎌倉にはある実業家の細君になった、あいつの学校友だちが住んでいる。——そこへ遊びに行くと云うのだが、何もこの雨の降るのに、わざわざ鎌倉くんだりまで遊びに行く必要もないと思つたから、僕は勿論僕の妻も、再三明日にした方が好くはないかと云つて見た。しかし千枝子は剛情に、どうしても今日行きたいと云う。そうしてしまひには腹を立てながら、さつきと支度して出て行ってしまった。

事によると今日は泊とまつて来るから、帰りは明日あすの朝になるかも知れない。——そう云つてあいつは出て行つたのだが、しばらくすると、どうしたのだかぐつしより雨に濡れたまま、まつ蒼な顔をして帰つて来た。聞けば中央停車場から濠ほり端ばたの電車の停留場まで、傘かさもささずに歩いたのだそうだ。では何故なぜまたそんな事をしたのだと云うと、——それが妙な話なのだ。

千枝子が中央停車場へはいると、——いや、その前にまだこう云う事があつた。あいつが電車へ乗つた所が、生あいに憎く客席が皆塞ふさがつている。そこで吊つり革かわにぶら下つてみると、すぐ眼の前の硝子窓ガラスに、ぼんやり海の景色が映るのだそうだ。電車はその時神保町じんぼうちようの通りを走つていたのでから、無論海むろんの景色などが映る道理はない。が、外の往来の透すいて見える上に、浪の動くのが浮き上つている。殊に窓へ雨がしぶくと、水平線さえかすかに煙つて見える。——と云う所から察すると、千枝子はもうその時に、神経がどうかしていたのだろう。

それから、中央停車場へはいると、入口にいた赤帽あかぼうの一人が、突然千枝子に挨拶あいさつをした。そうして「旦那様だんなはお変わりもございませんか。」と云つた。これも妙だつたには違ちがいない。が、さらに妙だつた事は、千枝子がそう云う赤帽の問を、別に妙とも思わなかつ

た事だ。「難<sup>ありがと</sup>有う。ただこの頃はどうなすつたのだから、さっぱり御便りが来ないのでね。」——そう千枝子は赤帽に、返事さえもしたと云うのだ。すると赤帽はもう一度「では私<sup>わたくし</sup>が旦那様にお目にかかつて参りましょう。」と云った。御目にかかつて来ると云つても、夫は遠い地中海にいる。——と思つた時、始めて千枝子は、この見慣れない赤帽の言葉が、気違いじみているのに気がついたのだそうだ。が、問い返そうと思う内に、赤帽はちよいと会<sup>えしやく</sup>釈をする、こそこそ人ごみの中に隠れてしまった。それきり千枝子はいくら探して見ても、二度とその赤帽の姿が見当らない。——いや、見当らないと云うよりも、今まで向い合つていた赤帽の顔が、不思議なほど思い出せないのだそうだ。だから、あの赤帽の姿が見当たらないと同時に、どの赤帽も皆その男に見える。そうして千枝子にはわからなくて、あの怪しい赤帽が、絶えずこちらの身のまわりを監視<sup>かんし</sup>していそうな心もちがする。こうなるともう鎌倉どころか、そこにいるのさえ何だか気味が悪い。千枝子はとうとう傘もささずに、大降りの雨を浴びながら、夢のように停車場を逃げ出して来た。——勿<sup>もちろん</sup>論こう云う千枝子の話は、あいつの神経のせいに違いないが、その時風邪<sup>かぜ</sup>を引いたのだろう。翌日からかれこれ三日ばかりは、ずっと高い熱が続いて、「あなた、堪<sup>かん</sup>忍<sup>にん</sup>して下さい。」だの、「何故<sup>なぜ</sup>帰つていらつしやらないんです。」だの、何か夫と話しているらしい謔<sup>うわごと</sup>言

ばかり云つていた。が、鎌倉行きの祟りはそればかりではない。風邪がすっかり癒つた後でも、赤帽と云う言葉を聞くと、千枝子はその日中ふさぎこんで、口さえ碌に利かなかつたものだ。そう云えば一度なぞは、どこかの回漕店の看板に、赤帽の画があるのを見  
たものだから、あいつはまた出先まで行かない内に、帰つて来たと云う滑稽もあつた。  
しかしかれこれ一月ばかりすると、あいつの赤帽を怖がるのも、大分下火になつて来  
た。「姉さん。何とか云う鏡花の小説に、猫のような顔をした赤帽が出るのがあつたで  
しょう。私が妙な目に遇つたのは、あれを讀んでいたせいかも知れないわね。」——千枝  
子はその頃僕の妻に、そんな事も笑つて云つたそうだ。ところが三月の幾日だかには、も  
う一度赤帽に脅かされた。それ以来夫が帰つて来るまで、千枝子はどんな用があつても、  
決して停車場へは行つた事がない。君が朝鮮へ立つ時にも、あいつが見送りに来なかつた  
のは、やはり赤帽が怖かつたのだそうだ。

その三月の幾日だかには、夫の同僚が亜米利加から、二年ぶりに帰つて来る。——千枝  
子はそれを出迎えるために、朝から家を出て行つたが、君も知つている通り、あの界隈は  
は場所がただけに、昼でも滅多に人通りがない。その淋しい路ばたに、風車売りの荷が  
一台、忘れられたように置いてあつた。ちようど風の強い曇天だつたから、荷に挿した色

紙ろがみの風車が、皆目まぐるしく廻っている。——千枝子はそう云う景色だけでも、何故かなぜ心細い気がしたそうだが、通りがかりにふと眼をやると、赤帽をかぶった男が一人、後うしろ向きにそこへしゃがんでいた。勿論これは風車売が、煙草たばこか何かのんでいたのだろう。

しかしその帽子の赤い色を見たら、千枝子は何だか停車場へ行くと、また不思議でも起りそうな、予感めいた心もちがして、一度は引き返してしまおうかとも、考えたくらいだったそうだ。

が、停車場へ行つてからも、出迎えをすませてしまうまでは、仕合せと何事も起らなかった。ただ、夫の同僚を先に、一同がぞろぞろ薄暗い改札口を出ようとすると、誰かあいつの後うしろから、「旦那様は右の腕に、御怪我おけがをなすつていらつしやるそうです。御手紙ごてがみが来ないのはそのためですよ。」と、声をかけるものがあつた。千枝子は咄嗟とつさにふり返つて見たが、後には赤帽も何もない。いるのはこれも見知り越しの、海軍将校の夫妻だけだった。無論この夫妻が唐突とうとつとそんな事をしゃべる道理もないから、声にした事は妙と云えば、確かに妙に違いなかつた。が、ともかく、赤帽の見えないのが、千枝子には嬉しい気がしたのである。あいつはそのまま改札口を出ると、やはりほかの連中と一しよに、夫の同僚が車くるま寄せから、自動車に乗るのを送りに行つた。するともう一度後から、「奥様、



旦那様は来月中に、御帰りになるそうですよ。」と、はつきり誰かが声をかけた。その時  
 も千枝子はふり向いて見たが、後には出迎えの男女のほか、一人も赤帽は見えなかった。  
 しかし後にはいないにしても、前には赤帽が二人ばかり、自動車に荷物を移している。――  
 その一人がどう思ったか、途端にこちらを見返りながら、にやりと妙に笑って見せた。  
 千枝子はそれを見た時には、あたりの人目にも止まったほど、顔色かおいろが変ってしまったそ  
 うだ。が、あいつが心を落ち着けて見ると、二人だと思つた赤帽は、一人しか荷物を扱あつか  
 っていない。しかもその一人は今笑つたのと、全然別人に違いないのだ。では今笑つた赤帽  
 の顔は、今度こそ見覚えが出来たかと云うと、不相あいかわらず変記憶がぼんやりしている。いくら  
 一生懸命に思い出そうとしても、あいつの頭には赤帽をかぶつた、眼鼻のない顔より浮ん  
 で来ない。――これが千枝子の口から聞いた、二度目の妙な話なのだ。

その後一月ばかりすると、――君が朝鮮へ行つたのと、確か前後していたと思うが、実  
 際夫が帰つて来た。右の腕を負傷していたために、しばらく手紙が書けなかつたと云う事  
 も、不思議にやはり事実だつた。「千枝子さんは旦那様思いだから、自然とそんな事がわ  
 かつたのでしょう。」――僕の妻さいなぞはその当座、こう云つてはあいつをひやかしたもの  
 だ。それからまた半月ばかりの後のち、千枝子夫婦は夫の任地させほの佐世保へ行ってしまつたが、

向うへ着くか着かないのに、あいつのよこした手紙を見ると、驚いた事には三度目の妙な話を書いてある。と云うのは千枝子夫婦が、中央停車場を立った時に、夫婦の荷を運んだ赤帽が、もう動き出した汽車の窓へ、挨拶あいさつのつもりか顔を出した。その顔を一目見ると、夫は急に変な顔をしたが、やがて半ば恥かしそうに、こう云う話をし出したそうだ。——  
夫がマルセイユに上陸中、何人かの同僚と一しよに、あるカツフェへ行っていると、突然日本人の赤帽が一人、卓子テーブルの側へ歩み寄つて、馴なれなれ々々しく近状を尋ねかけた。勿論マルセイユの往來に、日本人の赤帽なぞが、徘徊はいかいしているべき理窟りくつはない。が、夫はどう云う訳か格別不思議とも思わずに、右の腕を負傷した事や帰期ききの近い事なぞを話してやった。その内に酔よっている同僚の一人が、コニヤツクの杯さかずきをひっくり返した。それに驚いてあたりを見ると、いつのまにか日本人の赤帽は、カツフェから姿を隠していた。一体あいつは何だったろう。——そう今になって考えると、眼は確かに明いていたにしても、夢だか實際だか差別がつかない。のみならずまた同僚たちも、全然赤帽の来た事なぞには、気がつかないような顔をしている。そこでとうとうその事については、誰にも打ち明けて話さずじまつた。所が日本へ帰つて来ると、現に千枝子は、二度までも怪しい赤帽あに遇つたと云う。ではマルセイユで見かけたのは、その赤帽かと思いましたが、余り怪談じみている

し、一つには名誉の遠征中も、細君の事ばかり思っているかと、嘲あざけられそうな気がしたから、今日きょうまではやはり黙もくっていた。が、今顔を出した赤帽を見たら、マルセイユのカツフエにはいつて来た男と、眉毛まゆげ一つ違ちがっていない。——夫はそう話し終おつてから、しばらくは口を噤つぶんでいたが、やがて不安そうに声を低ひくすると、「しかし妙じやないか？ 眉毛一つ違ちがわないと云うものの、おれはどうしてもその赤帽の顔が、はつきり思い出せないんだ。ただ、窓越まどこしに顔を見た瞬間、あいつだなと……」

村むら上かみがここまで話して来た時、新にカツフエへはいつて来た、友人らしい三四人が、私わたしたちの卓テーブル子こへ近づちかづきながら、口々に彼あいつへ挨拶あいさつした。私は立ち上あつた。

「では僕は失敬しよう。いづれ朝鮮へ帰る前には、もう一度君を訪ねるから。」

私はカツフエの外へ出ると、思わず長い息を吐ついた。それはちようど三年前、千枝子ちえこが二度までも私と、中央停車場に落ち合うべき密みっ会かいの約を破やぶつた上、永久に貞淑な妻でありたいと云う、簡単な手紙をよこした訳が、今夜始めてわかったからであつた。……

…

(大正九年十二月)



# 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1993（平成5）年12月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：かとうかおり

1998年12月19日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 妙な話

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>